

日本造園学会誌

# ランドスケープ研究

Landscape Research Japan

Journal of the Japanese Institute of Landscape Architecture

---

■特集・CSRがつくる風景

VOL.72 NO. 3

Nov, 2008

ISSN 1340-8984

社団法人 日本造園学会  
JAPANESE INSTITUTE OF LANDSCAPE ARCHITECTURE

# アートによる炭鉱遺産空間と地域の再生

主催者：吉岡 宏高 太田 清澄 上遠野 敏 酒井 裕司 伊佐治知子  
 企画責任者：小林 昭裕\*

## 1. 開催主旨

空知旧産炭地域では、炭鉱遺産の保全・活用に向けた市民活動が1998年頃から続けられてきた。しかし、大部分の地域住民は、炭鉱遺産を「価値がない過去の遺物」という固定的な見方で捉えており、市民活動の拡がりにとって大きな支障となってきた。この局面を打開するためには、炭鉱遺産の持つ価値を今日的視点から再評価し、炭鉱遺産を核にした空間の活用事例を示すことによって、多くの人々が注目する可能性をアピールする必要がある。そのための試行的取り組みとして、炭鉱遺産空間の価値向上を図る手段としてアートに着目して、様々な取り組みを展開してきた。本ミニフォーラムでは、これまでの経緯を整理するとともに、空間の価値化にとって、アートがどのように貢献し得るのか、また地域内外の認識格差など展開上の課題について議論する。

## 2. 主要参加者と役割

- ・太田 清澄 札幌学院大学大学院（コーディネーター）
- ・吉岡 宏高 札幌国際大学観光学部（予備知識の提供＝炭鉱遺産市民活動の取り組みと価値の考え方提示）
- ・上遠野 敏 札幌市立大学デザイン学部（実践活動の報告）
- ・酒井 裕司 イメージランドスケーププランニング（実践活動の報告）
- ・伊佐治知子 NPO法人炭鉱の記憶推進事業団（地元の課題報告）

## 3. 開催概要

### （1）空知産炭地域の取り組み経緯説明（吉岡宏高）

地域の再生に向けて、地域固有の資産である炭鉱遺産を活用しようと、市民の手によって、幌内炭鉱景観公園の整備が進められている。地域から、「粗大ゴミだ」「廃墟だ」「汚い」と言われ続けてきた、幌内炭鉱跡地は、毎年3,000人が訪れる場となった。今日、ここでは様々なアクティビティーが展開され、地域内外の人を結ぶ新たなつながりが生まれている。この取り組みは、2001年から続けられてきた。その主体はあくまで地元市民であるが、地域外の専門家や学生など支援も大きな支えとなっている。なかでも、産炭地域として同じ文脈にあるドイツ・ルール地域との交流は、貴重な示唆を与えてくれた。社会的活動があるから空間が生きる、生きた空間があるから社会的活動が活発化する。この「鶏が先か卵が先か」という関係を解きほぐし、一定の方向に向けて、現実を変えて行こうとする市民の取り組みが進められている（図-1）。

炭鉱遺産は、日々劣化しており、市民活動だけでは対応に限界があることも事実である。また、より多くの市民の参加は、遅々としていることも事実で、これから、様々な課題が噴出するかもしれない。しかし、幌内炭鉱景観公園では、今も実践が続けられ、明確な意志と方向性を持って、プロセスの継続から得られる

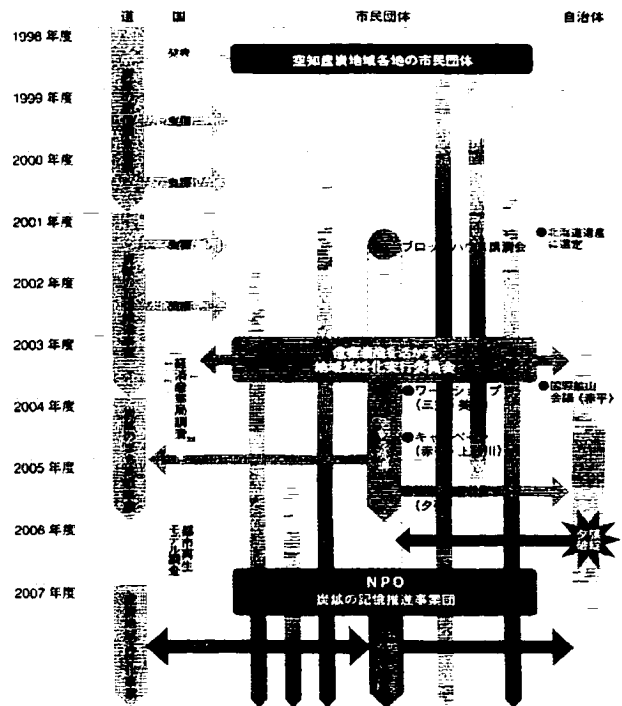


図-1 空知産炭地域の取り組み経緯

創発的な効果を期待して、空知旧産炭地域での炭鉱遺産市民活動の象徴的存在として位置づけられている。地域外の力を内部化することによって、幌内炭鉱景観公園としての形が整ってきた今、質的なステップアップを図る段階に差し掛かっている。いかにして、新たな外の力を取り入れ、内部の力と調整するかが今後の焦点である。炭鉱遺産は、場の記憶をとどめた独特の空間と、散在している炭鉱由来の工業素材、ランドスケープとアートの融合する道を模索している。

### （2）2004FY 赤平でのインスタレーションの成果（上遠野敏）

アートには地域に眠る資産を、人々の意識に表出させる力がある。その前段として、地域住民とのコミュニケーションがある。ここでは赤平アートプロジェクトイベントを紹介する（写真-1）。

写真は、当時のロッカーで、ワイヤーで吊り下げるタイプであり、再生してその場のイメージさせる作品である。お風呂を歩くことによって、地底と地上、建物に記憶、イメージを握り起こすようなことを狙った。また、搾取する、搾取される側の相克をイメージ化した。

空知の産炭地には、アーティストが泣いて喜ぶほどの空間と景観がある。そこには、場の営みが何かしらの記憶として感じられ、負の遺産であるがゆえに、作品制作へのモチベーションが働くところであり、それが人々を惹きつける。

\*専修大学北海道短期大学みどりの総合科学科



写真-1 赤平炭鉱 アートプロジェクト

(3) IBA エムシャーパークと幌内炭鉱景観公園 (酒井裕司)

エムシャーパーク構想では、環境や景観に対する障害を除去し、工業的景観の中で生活する住民の「生態系的・都市的・社会的」な条件を改善するため、緑地帯の再生、河川水系の環境改善、歴史的遺産の保全活用、住宅や産業拠点の面的な再生という建築プログラムとして、住宅を核とする都市再生、産業パーク構想が示された。自然再生の過程は同じでなく、自然の力にゆだねる方法から、整形的に育成されているものなど様々なタイプがある。また、廃棄予定の立杭を移築し、活用している例もある。ドイツではアートによる炭鉱遺産空間と地域再生に対し、EUを含めて多額な資金が投入され、見せるきっかけを作っている。地域全体で工業社会から芸術文化社会へ転換、斬新なサイン計画など、全体的に洗練された仕組みが構築されている。

事例と示した、幌内炭鉱景観公園は、本格着手から4年、総工費わずか5万円で、年間3,000人が来訪する場となった。日常的維持管理は、地元の元炭鉱マンを中心とする市民が担っている。多くの制約がある環境で協同作業を遂行するという、坑内労働環境で培った技能を発揮し、埋もれていた地域資源を顕在化する作業が徐々に成果をあげてきた。

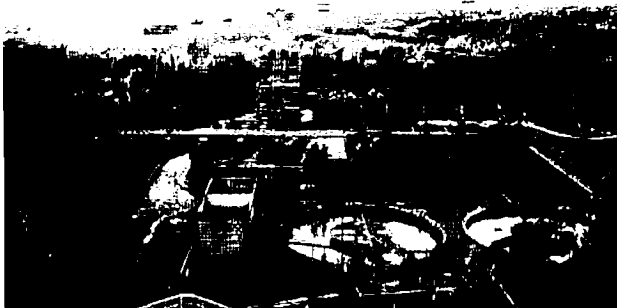


写真-2 ドイツエムシャーパーク 自然の復元

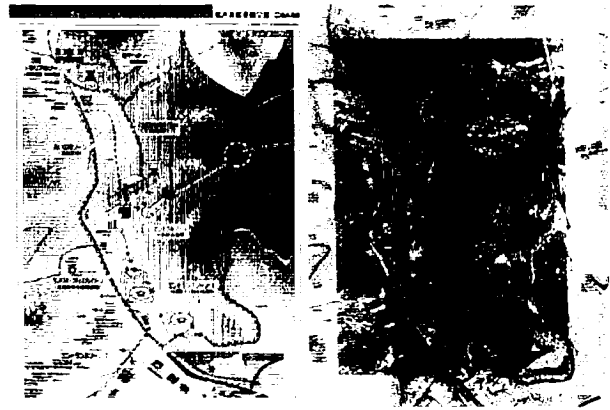


写真-3 幌内炭鉱景観公園ゾーニングプラン

幌内景観炭鉱公園は、炭鉱跡という場所性、遺産施設の今後の活用、幌内からの展開を考える場として提案された。一般の人が持つ公園の概念とは異なるものである。元炭鉱マンら市民による公園での作業は、坑内労働の再現にほかならない。米訪者は、その現場に立ち会うことを通じて、炭鉱への愛着と誇り、独特な炭鉱コミュニティの真髄をうかがい知ることができ、体験を通じて炭鉱の記憶を呼び起こす仕掛けになっている。

(4) 産炭地域での展開と課題 (伊佐治知子)

幌内で再生されつつある風景を、単に荒らしたり、利用したりするだけでなく、歴史や暮らし、日本の近代化を支えてきた産業が、未来につないでいく方向性を見失わないでほしい。その必然的な形は、方向を見失わないことで、人と自然によって磨かれる。それゆえに炭鉱施設という、いったん、人が捨て去ったモノを通じて、当時の人がモノをどのように使ったのかを時代を越えて伝えることができる。かつての炭鉱は、自然を破壊する産業であった。眼前に広がる光景をみると、残された産業施設群は、自然の中の一要素として飲み込まれつつある。

これからも幌内炭鉱跡地の活用を始め、地域のヤマの記憶を活かしながら歩いていくが、中庸の姿勢で続けていきたい。なぜなら、イメージを固定させたくないからである。幌内の地に携わる人も変わる。いろいろな人が来て、地域住民と、それぞれの思いがつかぬ中で展開される余地を将来的にもつことが望ましい。

(5) 討論

かれこれ10年近くの地道な活動が、少しずつ輪郭を見せ始め、それが地域の中の人の輪、さらに外の力を呼び寄せる方向にシフトしつつある。しかしながら、内部の力は抛り所となる施設資源、高齢化する人的資源をはじめ、遺失が避けられないなかで、これまで以上にスピード感をもつ取り組みが必要である。

幌内炭鉱景観公園を例に挙げるならば、地域外の力を内部化する形が整ってきた今、質的なステップアップを図る段階に差し掛かっている。いかにして、新たな外の力を取り入れ、内部の力と調整するかが今後の焦点である。特に地域の内外間の認識の格差は、ある意味、水力発電に例えるならば、知的情報としての、認識のギャップが、米訪者をこの地域に惹きつける原動力となる。まさに、重力差に着目し、大きなエネルギーを生み出すことができるのである。場の記憶をとどめた独特の空間である炭鉱遺産を、来訪者に強く意識させる仕掛けとして、アートは他の分野、技術にはない、着想と訴求力がある。

## 企画委員会

## 市民の手でつくる幌内炭鉱景観公園

企画責任者：NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団 吉岡 宏高\*

## はじめに

三笠市の旧北炭幌内炭鉱跡地では、産業遺産を生かした公園づくりが、市民の手によって進められている。地域内外の交流と産業的自然の価値をもとに、知識創造のプロセス定着を目指して、市民による具体的な空間整備が続けられてきた。ドイツIBAエムシャーパークに刺激を受けながら続けてきた取り組みの経緯と、地域再生に向けた空間整備の意義を考察した。

## 1. 位置・空間の概要

三笠市幌内地区は、札幌市の東北東約50km、夕張山系西縁の山間に位置する。幌内川に沿って約3kmにわたる谷には、最盛期に約15,000人が住んでいたが、現在の人口は約780名で、高齢化率は全市平均40.0%よりも高い水準にある。

幌内炭鉱は、1879(明治12)年に北海道で最初の近代炭鉱として開発され、1882(明治15)年には日本で三番目の鉄道(官営幌内鉄道)が開通した。

幌内炭鉱景観公園は、幌内川の最上流部にあり、概ね南北600m・東西200m、約10haの範囲で、狭い谷底平地と比高5m程度の何段かの河岸段丘によって構成されている。一帯は最初の坑口が開かれ、鉄道の起点となった歴史的な地であり、かつては揚炭坑口や選炭機など生産施設、炭鉱住宅が展開していた。

1989(平成元)年の閉山後は居住人口がゼロとなり、自然が猛烈な勢いで取り戻しつつある。閉山時の混乱に紛れて産業廃棄物が不法投棄されたり、壊せなかったコンクリート基礎など残骸が一部に残るなど、市民は「ゴミ溜め」「廃墟」といったネガティブな評価しか持っていなかった。施設を完全に撤去できないまま炭鉱会社が倒産し、税金や貸付金の肩代わりに三笠市が土地を取得した。一帯ではテーマパーク「三笠鉄道村」の建設構想が一部で具体化した。バブル崩壊によってその後の展開は中止された。そのため、行政・市民も意図しない中で、結果として炭鉱遺産が残され放置される結果となった。

## 2. 市民による公園造成の展開プロセス

北海道空知支庁が1998年から主導した「炭鉱の記憶事業」を背景に、炭鉱発祥地という歴史的文脈と炭鉱遺産を頼りにして、市民団体(みかさ炭鉱の記憶再生塾)が実践をスタートした。

2001~2002年は、架設的な「場」として「幌内歩こう会」を8回にわたり集中開催し延べ253名が参加した。市内内外の炭鉱遺産に対する認識や知識差が突破口になると考え、多くの人が時間・空間を共有し、「全く価値のない廃墟だ」という市民の言説と、「実際に多くの人が興味関心を持つ」現実とを対比することを通

じて価値発見を目指した。

2003年以降は、価値創造・価値表現へのステップアップを目指して、幌内炭鉱景観公園という具体的な空間を持つ「場」の形成を通じて、社会的活動を巻き起こすことに主眼を置いた。2003年に、ドイツ・ルール地域で先行的に展開していたIBAエムシャーパークの取り組みを提示するため、ブロックハウス博士(レームブルック美術館館長)を招き、約120名が参加するフィールドワークを実施した。博士の来訪に合わせて、廃墟と化していた歴史的建築物(幌内変電所)や選炭機跡地での順路の整備を行ったことが、市民による公園づくりの直接的な契機となった。

財政難から行政による具体的な空間整備は絶対無理であるという一般認識に対抗して、市民自治的に空間整備に着手したことは、多くの人にインパクトを与えた。さらに、ルール地域と幌内との間に共通する(炭鉱)景観公園というコンセプトが明確に意識され、具体的な「場」としての空間形成に向かった。当初は地域外からの助力と刺激が相当のウェイトを占めていたが、2005年以降は地元市民が主体的に活動を担う局面が多く見られるようになった。

## 3. 課題と今後の展開

幌内炭鉱景観公園は、本格着手から4年が経過し年間3,000人が来訪する場となった。日常的な維持管理は、元炭鉱マンを中心とした地元市民が担っている。多くの制約がある環境で協同作業を遂行するという厳しい坑内労働で培った技を発揮し、5万円という破格の総工費によって、埋もれた地域資源を顕在化し空間の質を着々と向上させてきた。

一般の人が持つ公園の概念とは異質なものであるが、元炭鉱マンら市民による公園での作業は、坑内労働の再現を意図している。来訪者は、その現場に立ち会うことを通じて、炭鉱への愛着と誇り、独特な炭鉱コミュニティの真髄をうかがい知ることができ、普通の公園では見ることができない大きな魅力となっている。

炭鉱遺産は日々劣化しており市民活動だけでは対応に限界があることや、地元市民の参加者の拡がりはなかなか進まないなど課題も多い。公園として見た時に、質的なステップアップを図る段階に差し掛かっていることから、新たなテーマ性の導入(例：ランドスケープとアートの融合)により、再び外部の血を入れ内部の力と調和させて推進力の再構築を図ることが必要となっている。

## 参考文献

吉岡宏高(2005)：炭鉱遺産でまちづくり：富士コンテム

\*札幌国際大学観光学部観光学科

企画委員会

# 炭鉱遺産などの地域資源を活かした空知産炭地域の 広域景観づくり

主催委員会：北海道空知支庁空知産炭地域広域景観調査会議

企画責任者：小林 昭裕\*

## 1. 開催主旨

空知支庁では、旧産炭地域の活性化を目指し、「元氣そらち！産炭地域活性化促進事業」を実施している。事業の推進に当たり、学識経験者からなる「空知産炭地域活性化戦略会議」を設置し、その下に「広域景観調査会議」を設け、地域における広域景観の現状と課題を明らかにし、炭鉱遺産などの地域資源を活かした戦略的な広域景観形成を通じた地域再生を検討している。

## 2. 開催概要

### (1) 調査対象地域

北海道景観形成基本計画(1999年)に位置づけられた10景域のうち「空知景域」に含まれる旧産炭地域(石狩炭田)及びその周辺地域を含めた地域とした。

### (2) モデル検討地域

空知産炭地域固有の広域景観づくりの検討を行うため、具体的な地域を対象にケーススタディとしてのモデル検討地域を定めた。そこで得られる景観資源の捉え方、まちづくりにつながる展開手法は、他の旧産炭地域における取組みにも有効に応用できるよう、手法の汎用化を目指した。

### (3) 調査結果

#### (i) 景観特性

自然景観特性、農村部～田園の景観特性、市街地～まちに区分し、マクロな視点から景観特性の抽出を行った。産炭地としての広域的景観特性と、各産炭地に共通する特性、各産炭地固有の特性を捉えた。

#### (ii) 地域らしい景観特性

それぞれの産炭地に着眼すると、炭鉱遺産に関しては、企業毎、炭鉱(やま)毎の個性～カラーがあること、特に、地域ごとの固有の歴史(開拓、炭鉱の開発～衰退、基幹産業の推移等)の特徴があり、景観的には、谷地形による領域感の違い、沿道景観の町並み形成の違い、シンボリック的要素の立地特性の差異が確認された。

#### (iii) 空知産炭地域固有のモデル検討地域の景観特性

地形・自然、土地利用、都市・集落、温泉・交通網、炭鉱遺産の5つの観点から整理した。各産炭地に共通する点として、

地形・自然：山地を背景とした川沿いの平地～沢伏～盆地状地形

土地利用：川沿いの平地に広がる田園～農村景観、山間部のダム湖

都市・集落：背後に山を控える市街地、炭鉱遺産・炭鉱住宅等炭鉱の歴史を伝える街なみ

温泉・交通網：平野から山間地に入り込む幹線道路、鉄道

炭鉱遺産：ズリ山、生産施設、事務所、炭住市街地、鉄道(跡地)を見出した。

#### (iv) 景観づくりの問題・課題と取組方向

地域の政策担当者とワークショップを重ね、次のような3点からなる結論を得た。

①炭鉱遺産の保全と活用に関しては、放置され損傷の進行する炭鉱遺産の活用方針の検討、炭鉱を語り継ぐ人材遺失への対応、炭鉱遺産だけをテーマとした取組の限界に対する対応。

②地域らしい景観づくりに関しては、空知らしさを伝える景観づくり、豊かな自然と田園景観の保全・活用、魅力ある街なみの形成。

③総合的な取組の方向に関しては、空知の魅力を五感を通じて総合的に伝える点、市町村界を越えた広域連携の仕組みづくり。

これらが重要とされた。

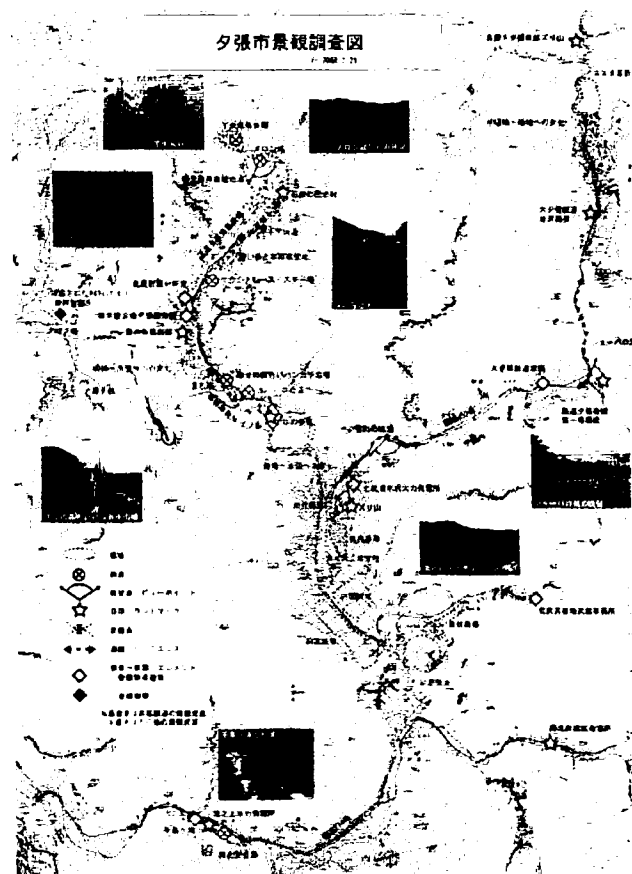


図-1 モデル検討地域の景観特性(夕張)

\* 専修大学北海道短期大学みどりの総合科学科